

田平（たびら）と焼罪殉教地に就て

立川 輝 信

本稿「平戸とキリストン」項中焼罪処刑された宣教師について中津

市では調査が出来なかつた。特に中津のカトリックの教会でも不能だつたとある。あれだけ立派な記念碑、ダテには建てぬ。調査不能とは遺憾至極、これでは殉教された宣教師に対し、また田平町民に対しても相済まないと思考するので他山の石となれば幸と、片岡彌吉氏著「長崎の殉教者」中より左に摘記する次第である。

因に片岡氏は明治四十一年の長崎市生れで純心女子短期大学教授で専攻は日本近世史、特にキリストン史研究に努力し、キリストン文化研究会評議員で、キリストン関係の著書も多い。国東の岐部カッスイの記念碑除幕式では記念講演をされた人である。

田 平（たびら）

田平は籠手田氏（こてだ）の本拠、田平栄が、籠手田と生月島山田とを領するにいたつて、籠手田氏を称するようになったのです。しかし、アントニオ籠手田安経のとき、度島（たくしま）を与えられて、籠手田は松浦氏の直領になりました。従つて、むかしキリストンとの縁は深くなかつたのですが、今日、籠手田（今は小手田と書く）地方

は松浦郡では最もカトリックの盛んな所になっており、大きな教会があります。この教会と、殉教地焼罪（やいだ）とは田平のもつ二つのキリストン崇敬地となっています。

焼罪殉教地

「身体を殺して後何もする事の出来ないものを恐れるな」（ルカ一四）と、カミロ、コン場スタツオ神父は、死を前にして、周曲の群衆の説教していました。一六二二年九月五日のことです。所は田平の焼罪。海岸から一〇〇メートルの所に矢来が組まれていました。見通しのきく広い場所でした。沢山の群衆が集っていました。群衆の中にはイギリス人とオランダ人の顔もたくさんまじっています。長崎港に入港していた一三隻の英蘭船の乗組員たちが来たのです。

カミロ神父は人並ずぐれて美しい容貌の持主で、背丈の高い人ででした。その美しい顔は、人々に救いの道を知らせようとする熱意に燃えていました。

日本語の説教が終ると、ポルトガル語とオランダ語で繰り返しました。貿易の利益のために信仰をすてているイギリス人と、オランダ人らに良心の咎をかき立ててやるうと思つたのであります。

火が燃え上がりました。柱にしばらく燃えつた神父の姿がもうもうたる黒煙にかくされました。しかし、火をはくような説教の声が、矢来を越

えて人々の耳にひびきます。火が着物につき、熱気が息をとめようとしてきました。最後の声をしばって、讚美歌「ラウダテ」をうたうのがきこえてきます。讚美歌をうたい終ると、「サンツマ」（聖なる哉）の祈りを五度となえました。それが最後でした。

黒煙がおさまり、神父の姿が現われました。修道服はまったく焼え切れて白い体がちらつと見えたとしようと、真黒くこけてしまいました。死体は海中に投げ込まれました。

こうしてカミロ神父は、自分がそれを伝えるために、生命をささげたのでした。「身体を殺すものを恐れず」魂を永遠にながらえさせ給う神父への信仰に生きたのです。時に年五〇歳余り。

イギリス人と、オランダ人とをふくむ無数の群集がその様子をじっと見ていました。

神父はナポリ同王コセンザ生れのイタリヤ人です。一六〇五年（慶長一〇年）日本に渡り、小倉・堺などで布教すること九年、一六一六年（慶長一九年）マカオに追放されました。

「カミロ神父は、日本キリシタン一同と聖結婚をしたのだ」といわれていたほど、日本人を愛し、日本人のために全身全霊を打ち込んで働いていたのです。日本歴史と仏教を研究していたのも、日本と日本人をよく知るため、マカオに追放されてから仏教についての本を書

いています。

マカオではシナの学問を勉強し始めましたが、日本忘れがたく、一六二一年（元和七年）、日本人の和船で潜入し、佐賀県下不動山や、唐津で働いてから平戸に渡りました。ここにはイスパニヤ商人エルナンド・シメネスがいたので、その家に潜伏し、平戸各地や生月島、網島、宇久島のキリシタンを指導していました。そして一六二二年、ついに宇久島で捕縛され、殉教することになったのであります。

〔片岡彌吉著「長崎の殉教者」自四四頁四行至四六頁一二行〕昭和三十一年五月三十日刊〕